

---

# 王様と喪女・改

館野寧依

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

王様と喪女・改

### 【Zコード】

Z5607Y

### 【作者名】

館野寧依

### 【あらすじ】

只野はるか、27歳事務員。漫画を描くことと、預金通帳の残高を見ることがだけが生きがいの非モテ女。

そんな彼女が大事な原稿を抱えてジャージ姿でいきなり落ちた先は、なぜか異世界の王様の婚礼契約書の上だった。

怒り心頭の王様は、責任をとつて結婚しろとはるかに迫るが……？

結婚は政略と考えている王と、ちょっとずれた女性の周囲を巻き込んだラブ・コメディー。

以前投稿していた「王様と喪女」の全面改稿版です。

よし、これが打ち終わつたら、すぐに家に直帰するわ。  
わたしはそう心に堅く決めて、主任に頼まれた文書を普段の一割  
り増しくらいの速度で、パソコンのキーボードを叩いていた。

わたしは只野はるか、二十七歳。職業は製造業の事務員。

……そんなわたしの印象は、とても地味だ。

ファンデを薄く塗り、リキッド口紅を軽くつけたのみの化粧は、  
よく言えばナチュラルメイク。

一応眉の手入れはしているけど、眉も描いていないといつ手抜き  
ぶり。

髪の毛もうねるくせつ毛を簡単に一つにまとめただけだ。

それに、会社の事務服があか抜けない水色のだぼつとしたものだ  
というのも、わたしの地味さを更に強調していた。

だけど、わたしは作業員のおばちゃん達相手に、巻き髪したり、  
つけまつげバチバチしたりする趣味はない。

そんな支度する暇があつたら、趣味か睡眠に当てたい。

そんなわけで、わたしはとっても垢抜けなかつた。

ただ、わたしに特筆するべきことがあるとすれば、大きすぎる胸  
くらいだろう。これだけは、みんなに褒められる。

わたしにしてみれば、肩は凝るし、太つてみられるし、服選びは  
大変だしであまりいいことはないんだけどね。

「只野さん。仕事あがつたら、みんなで飲みに行かない？」

「あ……、『はじめんなさい』。今日は用があつて無理なんです。すみま  
せん」

会社の営業の相田さんという女性から誘いを受けたけれど、気乗  
りのしないわたしはせつかくのお誘いを断つてしまつた。……本当

は大した用はないんだけどね。

「只野さん、付き合い悪いよー」

「本当にごめんなさい」

相田さんは冗談めかして言つてくるけど、たぶん内心では氣を悪くしているだろ？。

この飲み会、本当はただの飲み会じゃなくて、実際のところわたしと取引先の結構お偉いさんを引き合わせるための場であることをわたしは知つている。

「あの子もこんな機会でもなきや、彼氏もできないんだから。それにあちらともこれからもいい付き合いができるかもしないしね」  
「うつかりというか、ラッキーというか、わたしが給湯室でお茶を煎れてるときに、そのドアの前で相田さんが同じ営業の人と話しているのを聞いてしまったのだ。

なんでも、その取引先の人はわたしの胸が大きいのが気に入つたらしい。

……とすると、うちの会社に訪ねてくる度にわたしの胸のことを「相変わらず大きいねえ」とセクハラ発言してくるあの人だろうか。

……うん、やっぱり会いたくない。

会社のためなら、会つた方がいいのかもしれないけど、接待とか

苦手だし。わたしにはお茶出しどがせいいぜいだ。

それに、お酒の席とかで「まかされて、胸とか触られたら最悪だし。

おまけに、男慣れしていないわたしが取引先の人につましく対応できることも思えない。

「なんだ、このつまらない女は」

なんて思われたら、ちょっと、いやかなりへこむかもしない。

それでもつて、もしかしたら円滑だった今までの取引先との仲も悪くなるかもしれない。

……いや、これは最悪の事態を想像しただけだけどさ。

でも、相田さんのわたしへの心証は多少悪くなるかもしないけ

れど、それは仕事の方で挽回する」とにしようとします。

「そんなんだから彼氏もできないのよ」  
相田さんに嫌みを言われたけれど、わたしは気にしないことにした。

これは何度もいろんな人に言われていることだつたからだ。

確かにわたしには恋人はない。というかこの歳まで彼氏がいたことはない。

いわゆるもてない女　喪女と云つやつた。

顔面体はそこで悪くはない」と思つ。

もちろん、一の歳になるまでに恋人が出来るのは全くなかった

はなかつた。

今までに異性を紹介してくる相田さんみたいな人もいたし、知り合いや親に婚活を勧められたりした。

でも、わたしにはめんどうくさい男女の関係よりも、もつと大事な

「」があるのだ。

「よーし、下描きまでは完成ーっと

わたしはあの後、主任に文書を確認してもらつて〇〇が出了ところで、脇目もふらず家に直帰した。

趣味の漫画の下書きが予定したところまで終わりそうだったからだ。

その時のわたしは作成中のオリジナル漫画の進行具合が大変よろ

しかつたので、その事に浮かれ氣味だつた。

これなら早めにサイトに載せられそうだし、気の乗らない飲み会

よりは、時間の過ごし方としてはやつぱりこっちのほうが有意義だ。今は騎士と姫君の恋物語を描いていて、そこそこ見てくれる人もいるので、わたしはそれが嬉しくて頑張ってサイトを更新していた。でもどこかの出版社に投稿する気はさらさらなかった。そんな自信もなかたし、ウェブ経由でいろいろな人に見てもらえるということにわたしは満足していた。……それは完全に自己満足っていうものかもしれないけれどね。

「しつかし、さすがに肩こったなー」

ジャージ姿のわたしは、自分の部屋でこきこきと首を鳴らしながら独り言を言う。いい加減、この癖は改めなければと思つが、長年の癖なのでなかなか抜けない。

わたしは今度のサイト更新分の下書きまで終わつた原稿と漫画道具一式を百均で買つてきたプラスチック容器にまとめるとい、本棚兼物置に置きに行く。

この後の予定では、わたしのもう一つの趣味の預金通帳の残高を見て一人で悦に入る予定だつた。……まあ、あんまり他人に見せられるような趣味じやないよね。

預金通帳を見て、ニヤニヤする様は自分でも不気味かもしれないと思う。

しかし、その予定に反して、汚部屋に積み上げた漫画本の角に足の小指がぶつかり、わたしは見事に前につんのめつた。

「いってえ～っ！」

一十七の女の叫び声として、「これはどうかと思うが、本当に痛いのでしょうかない。

人間、とつさの時にはつい地が出てしまつものだ。

だが、原稿一式は死守。

“死のあつても、死守。

足の小指の痛みをこらえながら、わたしは転ぶのだけはどうにか持ちこたえて、その場に座り込んだ。

しかし、そんなわたしの目の前を何枚もの紙が舞っている。

……あれ、原稿用紙は封筒にしまってあるし、あんなふうに散らばる「とはないはずなのに」。

「……おい」

わたしが舞い落ちる紙に見とれないと、なぜかいきなり横から男に声をかけられて、わたしは思わず後ずさりとした。……がなんだこれ。

「おい、やめるー。」

なぜかいかも高価そうな馬鹿でかい机の上にいたわたしは、目の前の男に取り押さえられて呆然とする。

「どうだ、じいは。

さつ きまでわたしは自分の汚部屋にいたはず。

だけど、今いるのは異国情緒溢れる豪華絢爛な広い屋内。

そしてわたしを取り押さえているのは、浅黒い肌に銀髪の、深い青色の瞳をした美形。

「おまえ……、なんてことをしてくれたんだ」

美形がその秀麗な顔を歪ませて見てくるけど、いつしかせわざくろじやなかつた。

「いつたい、なに? なにが起つたの?」

汚部屋から豪華絢爛な室内に一瞬にして移動していくなんてあり

えない。

それに、目の前の絶対日本人じゃない顔立ちの男。

……これはもしかして、ひょっとしてひょっとすると、SFとかで言うなら海外とかにテレポート？  
もし、ファンタジーならウェブ小説とかでよくある異世界トリック  
�ってやつですか！？

高価そうな馬鹿でかい机の上からとつあえず降られたわたしは、田の前の美形に尋問された。

「おまえは誰だ。どうやら移動魔法で現れたようだが、どこから来た」

移動魔法とか言われても、よく分からない。

美形から魔法つて言葉が出たつてことは、やつぱりこれはファンタジーで、異世界トリップつてことなんだろうか？  
わたしが言葉を失つていて、美形は「答える」と厳しく言つてきた。

田の前の美形は威厳があつてとても偉そうだ。

……どうやらわたしは不法侵入者っぽいし、ここはおとなしく質問に答えた方がいいのかもしれない。

「……只野はるかです。日本から来ました」

「タダノハルカ？ ニッポン？ どこだそれは」

日本で通じないとしたら、じゃあ、これでどうだ。さすがにこれは通じるだろ。……ここがわたしが危惧したとおり異世界じやなければだけ。

「工業中心の島国です。ジャパンとも呼ばれています

「……ジャパン？ 島国？」

美形男は首を捻つてゐる。これでも通じないのか。  
やつぱりここは、考えたくないけど異世界なんだろうか？

「……恐れながら

今まで気がつかなかつたけど、近くには五十代くらいのおじさん  
がいた。その人が言葉を発する。

「この方は、異世界召喚された方では？」

「しかし、異国の者には見えるが、言葉が通じるぞ」

「ニッポンという国名に聞き覚えがあります。……確かガルディアの最強の女魔術師がその国の出身だつたかと」  
わたしはおじさんのその言葉に、今の状況も忘れてぽかんとしてしまつた。

「…………そうすると、その最強の女魔術師つて、日本人なの？」

「…………そうか。異世界召喚だというなら、いつも自然に言葉が通じるのは疑問だつたが、かの魔術師なら納得できるな」

美形が得心したように頷いた後、ガルディアに問い合わせなればなど呟いた。

「…………あの、普通は言葉が通じないものなんですか？」

異世界では言語が共通とかはないんだろうか。

「それはそうだろう。…………おまえはまったく行つたことのない大陸で話が通じるのか？」

それが、あまりにも当然の言葉だったので、わたしは納得してしまつた。

アメリカに行つて、日本語が通じないと一緒に。

まあ、稀にハワイとかグアムみたいな観光地の例もあるけど、でもそれは特殊な例で、一般的には他の大陸で日本語は通じない。

「言われてみれば、そうですね」

「…………でも、なんで召喚されたのがわたし？」

こんな枯れた地味女じやなくて、もつと若くて可愛い女子高生とか召喚すればいいじゃない。

「…………しかし、召喚されてきたのは分かつたが、おまえはとんでもないことをしてくれたな」

「はい！」

美形に呻くようにして言われたので、わたしは思わず大きな声で聞き返してしまつた。

「おまえは届いた婚礼契約書を滅茶苦茶にしてくれたぞ。あとは署名するだけだつたのに、どうしてくれる」

「どうしてくれるつて……、再発行してもうえぱいいだけでは？」

なんだか嫌な予感をじわじわ感じながらもわたしは答える。

「あれは他国からの書簡だ。そんなものをまた発行してもいいわけにはいかん」

美形にそう言われて、わたしは自分のしたことの重大さに血の気が引く思いだつた。

「す、す、すみません！」

これつて、わたしがこの人の婚礼を駄目にしちゃつたつてことだよね。

わたしは頭を下げて美形に謝つたけど、こんなことでは許してもられないだらうな。どうしよう。

ちらりと美形を覗うと、彼は苦虫を噛みつぶしたような顔をしていた。

「……仕方ない」

美形がそう言つたことで、わたしは許してもらえたのかと思つて頭を上げた。

「おまえが代わりに俺の花嫁になれ」

「えええ、嫌ですよ！」

わたしは思つてもいなかつた彼の言葉に、飛び上がって拒絶する。今まで男とは無縁の生活をしていたのに、いきなり花嫁になれてなんなんだ！

「俺だつて嫌だ。しかし、契約より先に婚礼が決まつていたことにしなければ先方に言い訳できん」

「でも、なんでわたしなんですか！？ 花嫁にするならもつと若くて綺麗な人がいるでしょう！？」

「この人がせつぱ詰まつていることは感じられたけど、やつぱり納得できないよ。

こんな美形なら、地位もありそつだし、女の子もよりどりみどりそつなの」。

「無理矢理そうすることもできるが、いきなり訳も分からず俺の花嫁にされる姫が氣の毒だ」

はい？ この人今、姫つて言った？

姫つて、貴族とか王族の女の人がよね？

……そんな人を花嫁に出来る日の前のこの美形はいつたい何者なんだ。

「姫つて……、あなたの身分はいつたいなんなんですか？」

「俺は、ザクトアリア国王、カレヴィだ」

「ルビー？」

なんとなくポテチが食べたくなつてくる名前だな。ちなみにわたしはコンソメ派だ。

わたしは目の前の緊迫した状況を一瞬忘れて、とぼけたことを思う。

「違う。カ・レ・ヴィだ」

すると美形が律儀にゆっくりと発音してくれる。

なんだ、某お菓子メーカーと同じ名前じゃないのか。紛らわしい名前だな。

「……つて、国王なんですか！？」

「……おまえ、驚くのが遅いぞ」

カレヴィ王が呆れたように溜息をついたけど、わたしはそんなこと気にしていられなかつた。

だつて、そしたらわたしは一国の王の花嫁になれつて言われてるつてことじゃない！

だとすると、わたしは国王の結婚を駄目にしたつてこと…？  
是非とも彼との結婚は拒否したいけど、なんといっても相手は王様。決定権はむこうにある。

下手したら不敬罪で投獄されちゃつたり、最悪の場合、国家同士の繋がりの機会を駄目にしたつてことで、極刑に処されたりするかもしれない。

あああ、まだ死ぬのは嫌だ。死にたくない。

今描いている漫画もまだ完結していないのに。

それなのに、なんでよりによつてわたしはそんな人の結婚を滅茶苦茶にしちやつたんだよーつ！

「お願いです。どうか殺さないでください」

「……俺は、なにもそんなことは一言も言つてないぞ」

わたしが王様に必死になつて頼むと、彼は啞然とした顔になつた。

……あれ、違うの？

いや、だつてさ。

わたしはこの婚礼の契約で生まれるはずだつた国と国の利益をぶち壊したんだから、展開的にはその場で殺されてもおかしくない立場だ。

だつたら、全くその可能性がないとは言えないじゃない。

「でもわたし、大事な契約書を駄目にしてしまつたし」

「だから、おまえが代わりに俺の花嫁になれと言つているだろ？」「わたしの言葉に対して、カレヴィ王は面倒くさそうに答えた。いや、でもそれはいくらなんでも投げやりすぎない？」

こんな地味で、政略的価値もないわたしを花嫁なんて、きっと国民も納得しないよ。

「国王の花嫁なんてわたしには無理ですって！」

それにわたしには王妃にふさわしい気品もなにもない。むしろがさつという言葉がふさわしい。

わたしは必死で訴えたけど、カレヴィ王の反応は冷たかつた。

「無理でもやれ。自分のしたことの責任は取れ」

「ええええ……」

わたしは情けない顔でカレヴィ王を見る。

一般庶民のわたしには、王様の伴侣なんて重すぎる。

それにわたしは美人でもなんでもないし。

わたしが困り果てて、近くにいたおじさんとカレヴィ王の顔を見回してたら、王様におもむろに言われた。

「とりあえず、タダノハルカ」

「あ、名前ははるかです。名字が只野で」

わたしが説明すると、カレヴィ王は納得したように頷いた。

「そうか分かった、ハルカ」

そして、カレヴィ王がわたしのよれよれのジャージ姿を見下ろして一言。

「その格好を今すぐどうにかしろ」

王様にどうにかしろと言われて、わたしはとりあえずこちらの衣装に着替えることになった。

それに当たつて、わたしはお風呂に入れてもいいことになってしまった。

そしたら侍女の一人に大事に持つていた原稿一式を奪われて、わたしはちょっと気が動転してしまった。

「そつ、それ、すごく大事なものだから、絶対捨てないで！ ゼッタイ、絶対だよ！！」

「か、かしこまりました」

侍女達はどん引きしていただけれど、間違えて捨てられでもしたら困る。

とりあえず、原稿の安全だけは確保したわけだけど、次にはわたしが侍女達に身ぐるみ剥がされるというピンチが待ち受けていた。

「おとなしくお湯に浸かられてくださいませ」

年甲斐もなく少々暴れてしまつたものだから、年かさの侍女から呆れたように言われてしまった。

……まあ、着るものがなければ、素直にそうするしかないし、わたしは半ば自棄になつて一個目の湯船に浸かった。

湯殿を見渡すと、泡風呂とか薬草風呂とかあるみたい。ちょっとした温泉施設だね。

侍女達は湯船に浸かっておとなしくなったわたしに安堵の溜息をついていた。

……おかしいなあ。そんなに暴れたつもりはないんだけど。

そして、泡風呂へ移動すると彼女達は一斉にわたしの体を洗い始めた。

「えええっ、ちょっと、ちょっとー！」

自分の体ぐらい自分で洗えますってと主張したが、侍女達には聞き届けてもらえず、わたしは体の隅々まで彼女達に洗われてしまつた。

……なんというかちょっと犯された気分。ほとんどが若い女の子達だけだ。

シャワーで全身に付いた泡を落とされて、今度はわたしは薬草風呂というか、ハーブ風呂に連れて行かれた。

ハーブ風呂はラベンダーが主体らしく、リラックスできるようないい匂いがしていた。ついでに浴槽にバラの花びらも浮いていた。

わたしに似合わねええと思ったが、口に出すと無粋なのでやめておく。うん、賢明だ。

そんなこんなでお風呂から上がつたら、侍女の一人に台の上へ横になつてくださいと言われて、すでにやけくそになつていたわたしはその通りにする。

そこで、いい匂いのするオイルを擦り込みながらの全身マッサージを受けた。

あー、肩と首のこりがちょっと酷いんだよね、と言つたらやっこを重点的にマッサージしてくれた。うへへ、極楽極楽。

さつきまでの羞恥もどこへやらで、わたしはご満悦になる。

そうしていろいろ間にも、他の侍女達がムダ毛の処理とか、手足の爪

磨きとかしてくれた。

一度も行ったことないけど、Hステッテこんなのかなあ。  
まあ、たまにはこんな体験もいいよね。なんといってもタダだし。  
……ここが異世界つてんじゃなら、もつといいんだけどね。

「それにしても、大きいのに形のよい素敵なお胸ですね」  
侍女の一人が感心したように言つた。

うん、その点だけはみんなに褒められるよ。ありがとう。  
「それに色白で、肌のきめも細やかで素晴らしいですわ」

まあ、日本人としては確かに白い方だけど、ここには白人の侍女  
もいるし、これはお世辞だらうなあ。

それに、肌のきめ云々はわたしにはよく分からぬ。みんなこんなものじゃないの?

全身マッサージも終わつて、ちょっと休憩と言つたところで、出されたジュースを飲んでいたら、侍女達はキラキラした素材の衣装をいくつか出してきて、わたしは思わず噴き出しそうになつてしまつた。まさかと思うけど、それをわたしが着るのか?

もうちょっと地味な素材はないの? せめて着る人に衣装は合わせて欲しい。

キラキラはやめて、キラキラは、と主張したけど、どうやらこれしかないらしい。えつ。

しかも、そのどれも胸元露わで、体の線を強調した衣装だつた。

……つーか、これを着るのか? 普段、ダラケきつた生活をしているこのわたしが?

逃げ出したかったが、なんといつてもわたしは裸。なのでどうするわけにもいかず、おとなしくわたしは侍女達にキラキラした衣装を着せられた。

お腹周りとか心配だつたけど、それはなんとか帯を巻いてしのい

だ。

衣装のスカート部分はくるぶしまでだけど、これが脚にまとわりついて非常に歩きにくい。

で、足には編み上げサンダル。

こここの気候は少々暑いみたいでこれが基本だそうだ。

そして丹念に化粧をされて、わたしの支度は終了。

「まあ、ハルカ様、とってもお美しいですわー」「ありがとう」

侍女達が褒めてくれたけど、田の前の鏡で自分の姿を確認したわたしは、特に舞い上がりもせずに冷静だった。  
確かに三割増しくらいで綺麗にはなっている。  
さつきのよれよれのジャージ姿からしたら別人だろう。  
だがしかし、元が平凡なわたしだ。

うん、やっぱり普通は普通だよねー。

わたしはそのことにむしろ安心しながらも、侍女達に先導されてまたカレヴィ王の前に連れて行かれた。

着替えさせられたわたしは、さつきカレヴィ王がいた部屋へ戻られた。侍女が言うにはそこは王の執務室らしい。

入室すると、そこに見知った人物がいたのでわたしはびっくりした。

だつて彼女がここにいるはずない。思わずわたしは自分の目を疑つた。

着ているのはドレスだし、ものすごく綺麗になつてゐるけど、でもやつぱり間違いない。

「ち、千花～っ！？」

「はるか、ひさしふりー。元気だつたー？」

幼なじみの千花に抱きつかれてわたしはちょっと呆然とする。千花とは小さい頃からの友達だけど、こんなことは聞いてない。まさに青天の霹靂だ。

「げ、元気、元気だけどー……なんで、ここに千花がいるの？」

今は確かに、結婚して外国にいるつて聞いてたんだけど。

「あれ、最強の女魔術師が日本人だつて聞いてなかつた？」

「聞いてたけど……まさか、それが千花だつていうの？」

友達が異世界で魔術師なんて、そんな馬鹿なことがあるの？

「うん、そのまさか」

「うつそ、そんなことありなの？」

千花、いつの間にそんなことになつたんだ。

「うん、まあ……。驚くのも無理はないと思つけどー……」

千花はそう言つと、困つたように頬に手をやつた。なんというか、どうしたことなく気品のある仕草だ。

「……なんだ、知り合いだつたのか？」

久しぶりのわたし達の再会を遠巻きにして見ていた王様が声をかけてきた。

「知り合いつていうか……友達です」

「久しぶりにはるかに会いたいなと思つたら、召喚の座標指定を少し失敗してしまいました。」迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

千花はわたしから離れると、カレヴィイ王とおじさんに頭を下げる。「いやいや、ティカ様が頭など下げないでください。あなた様にそんなことをされたら我々がガルティアに睨まれてしまいます」

おじさんがどことなくにやけた顔で、それでも慌てて言う。……まあ、千花は友達の羨眞目を引いてもとつても美人なんだけれどね。

「……それについてもなんでティカって呼ばれてるの？ 千花でしょ？」

綺麗な響きだけど、やっぱり聞き慣れないせいか違和感がある。

「うん、この大陸の人には千花って発音しにくいらしいんだよね。だからティカって呼ばれてるの」

そうなんだ。それなら納得。

それにしても友達が最強の女魔術師って呼ばれてるってすごいな

い？

「それにしても、千花、魔法使えるなんてすごいね。わたしにも使えるかな？」

わたしがわくわくしながら聞くと、千花はちょっと困った顔をした。

「うーん、はるかはあまり魔力がないから、あかりを灯す魔法ぐらいしか使えないと思つ」

「えー、そうなんだ。残念」

最強と言われる千花がそう言つんだから、事実なんだろう。でもあかりくらいは灯せるんなら、それを教わってもいいよね。

向ひの世界ではそれでも珍しいことだもの。

「……話に割り込むが少しいいか？」

カレヴィイ王が遠慮がちにわたしがちの話の腰を折った。

「はい、どうぞ」

千花は相手が王様だつて、いづれに堂々としている。ひょつとして、最強と言われるほど魔術師だと、いろいろな国の王族と対等に渡りあえるんだらうか。

さつきのねじれたもいやに腰を低くして『ティカ様』って呼んでたし。

すうご。すうごよ、千花。

わたしなんか、王様と向き合つて、命の危険まで感じて内心冷や汗ものだつたのに。

千花のこの肝の据わり方はマジでただ者じゃないよ。

「ハルカが突然現れることで、隣国の『ティアルスタン』王国の王女との婚礼契約書が滅茶苦茶になつた。最強の魔術師の力でどうにかならないか」

あ、そうだつた。

千花がどうにか出来るならわたしのしたことは不問になるよね。そしたら、王様と結婚しなくてもいいし。

「そうですね、婚礼契約書はどうにもなりませんが、ティアルスタンと話を付けることは出来ますよ。この場合、この婚礼はなしとうことになりますが」

「ああ、それでもいい。だが、国内に相手の名までは伏せてあるが、近々婚礼を挙げることは知らせてしまつてある。どうしたらいい」

ええ、そんなにせつぱ詰まつてるの？

だから、わたしを代役にしようとしたんだ。

「そうですね……」

千花は顎に指を当てて難しい顔をして考え込む。

その次に、千花の爆弾発言が投下された。

「はるかには申し訳ないですけど、このままあなたの花嫁になつてもうつことになりますね」

「ああ、それでいい」

えええええつ！？

カレヴィイ王は簡単に頷いてるけど、ちょっと待つてよ、わたしはそんなこと納得しない！

わたしは驚いて思わず飛び上がってしまった。

「えええ、千花ちょっと、それはひどいよ」

元々は千花がわたしを喚びだしたからこいつなつたんじゃない。

わたしは千花に縋りついて抗議する。

「うん、本当にこめんね。でも、カレヴィイ王に酷いことさせないつて約束する」

それって、結婚しても手は出させないってことだよね？

「いや、それより家に帰れないことの方が問題なんだけど。趣味だけど、サイトもやってるし」

「それは異世界召喚でどうにかなるけど。問題は会社だよね。それは残念ながらやめる」とになりそうだけ……」

それを聞いて、わたしは少なからずショックを受ける。

あああ、わたしの楽しい貯蓄生活が遠くなつていく……。

「そんなあ……。わたし、せつせと貯めた預金を確認するのが楽しみんなのに」

わたしがしょんぼりしていると、千花が慰めるようにわたしの肩に手を置いた。

「それなら、わたし向こうに架空の会社作るけど。はるかはるの事務員つてことにするよ。給料も今よりははずむし」

「ええっ、本当に…？」

思つてもいられない千花の言葉に、わたしは色めきたつてしまつた。なんだ、そんなんだつたら大歓迎だ。

それにも、魔術師つてそんなことまで出来ちゃうの？

つていうか、会社設立つて、千花いくら稼いでるんだ。

「カレヴィイ王と結婚すれば、多少王妃の仕事はあるけど、それ以外は趣味に没頭できるよ。……はるか、どうする？」

千花にそう言われて、わたしは躊躇することもなく笑顔で頷いた。

「ええー、それなら結婚する！」

こんな素晴らしい機会を見逃すなんてこと、わたしには出来っこ  
ない。……ああ、この先には充実した生活が待つていいんだね。  
訪れるだらう近い未来を予想して、うつとりするわたしをカレヴ  
イ王とおじさんが呆れた顔で見ていたけど、わたしはそんなことに  
構つてなかつた。

……多少問題ありだけど、趣味に浸れるつゝです”く素敵じゃない?

「ちょっと待て。王妃になるなら子を成してもらわなければ困る」  
しばらくわたしを呆れて見ていた王様が、はつと我に返ったように言った。

「けれど、はるかに無理強いはしたくないです……。その件については、わたしがどうにかしますから、カレヴィイ王はもう少しをお待ちいただけますか？」

千花がわたしの顔を見てから、少し困ったような様子で言った。  
うん、でもまあ、カレヴィイ王が言ったことはいく当たり前のことがなんだよね。

形だけの王妃なんて、もうつても困るだけだらう。  
そしたら、わたしはおいしいだけの話に食らいついてちや駄目だよね。

「千花、わたしなら別にいいよ。王様の子供産んでも」

わたしが決意表明すると、千花は驚いたように瞳を見開いた。

「え……、はるか、本当にいいの？ もしかしたら、この先好きな人が出来るかもしれないのに」

千花がうるたえたようにわたしの顔を見た。それにわたしは強く頷く。

「うん、いいよ。……ていうか、わたし自身、自分に好きな人が出来る甲斐性があるとは思えないんだよね」

それに加えて、今も彼氏いない歴更新中なんだから、この先もうな可能性が高い。

……だったら、別にカレヴィイ王とそうなっちゃつてもいいんじやないかなって思うんだ。

わたしのその言葉に、千花は微妙そうな顔をした。

……まあ、もてる千花には分からぬ感覚だろうなあ。たぶん、千花はわたしが投げやりになつてゐると思つてゐるかもしない。

まあ、成り行きつちゃ成り行きだけど、結婚するんだつたら、こつちもそれ相応の義務を果たさなければ駄目だよね。

「はるかが〇Ｋなら、わたしが口を挟むことじやないよね。……でも、なにか困つたことがあつたらすぐにおこなってよ？　出来るだけ協力するから」

千花がわたしの手を取つて、それでも心配そうに言つてくれる。

うん、持つべきものはやつぱり友達だなあ。

こういう友達がいるなら、別に彼氏とかいなくていいや。……

今度王妃になるけど。

「うん、ありがと。その時はよろしくね、千花」

「うん」

わたしと千花が和やかに話していると、カレヴィイ王がそこに割り込んできた。

「……話は済んだか？　ハルカが子を成す覚悟をしてくれて助かつたぞ。……ところでハルカの歳はいくつだ」

「え、二十七歳」

わたしがそう言つと、カレヴィイ王とおじさんが絶句した。

「俺より三つも上なのか？　てつきり二十歳そこそこかと……」

つていうことは、カレヴィイ王は今二十四なのか。

それじゃ、地味な上にこんな年上の女じや嫌かなあ。

「その歳では、既に男を知つているんじゃないのか？　王妃になるなら、清らかでなければならないぞ」

うんまあ、そう思つうのが普通だよね。

「ああ、それはないですから。わたしはとっても清らかですよー。なんといつても、わたしはもてない女ですから」

だから、その点だけは胸を張つて言える。

そしたら、わたしは事実を述べただけなのに、三人にものすゞく微妙な顔をされた。なぜだ。

「……そ、そ、うか、ならばいい。だが、おまえの年齢は二十歳といふことにさせてもらつ。二十七ではなにかと都合が悪い」

「……まあいいんですけど……」

個人的には鯖をよむのはどうかと思つけど、王妃にするにほこの歳ではいろいろと不都合な点があるんだろう。

……さつきカレヴィ王が言つてた男を知つてゐる云々と言つてくる輩も今後出てこないとも限らないしね。

「それじゃあ、今後よろしくお願ひします、カレヴィ王」

わたしが王様に深々とお辞儀をすると、彼は笑顔で頷いた。

「ああ、よろしくな。俺のことはカレヴィでいいぞ。俺に対しても敬語もいらない」

今まで気が付かなかつたけど、この王様はかなり気さくらしい。この先の人生、ずっと付き合つていかなくちゃならない相手なんだから、変に気を遣うような人でなくてよかつた。

わたしはほつとしながら笑顔で頷いた。

「うん、分かつた。カレヴィ」

「……ただし、公式な場ではそれなりの言葉遣いにしてもらうがなう、やっぱりそういうオチがつくよね。まあ、これは仕方ないか。「とりあえず、おまえには趣味に没頭する前に礼儀作法をみっちり学んでもらう。覚悟しておけ」

「ええ~っ

わたしはカレヴィの言葉に抗議の声を上げたが、彼はどこ吹く風だ。

「千花、助けてっ

「ごめん、こればっかりは我慢して」

頼みの千花にもそう返されて、わたしは撃沈した。うう、やっぱり駄目か。

王妃になるなら、それなりの気品を要求されることになるだろうから、たぶんその礼儀作法の授業は厳しいんだろうなあ。

……やっぱり、そうそううまい話は転がつてないよね……。

そう考へながら深く溜息をついてゐるわたしにカレヴィが言つてきた。

「取り急ぎおまえとの婚約の書類を作成するから、ハルカはそれに署名しin」

「うん」

カレヴィイからしたら、善は急げってことなんだろうなあ。  
カレヴィイがさらさらと書いた『両名は婚約の契約をする事に合意  
した』という文面に、わたしは彼のサインのあとに名前を書いた。  
「 これで契約成立だな。ハルカ、おまえも慣れない環境で大変  
だとは思うが頑張れ」

「うん」

いきあたりばつたりの政略結婚だというのに、わたしの心配まで  
してくれて、カレヴィイなんだかかんだ言つてもいい人だなあ。  
……うん、この人とならうまくやつていけるかもしねいなど、  
わたしは少しだけ安心した。

婚約も決まったことだし、わたしは婚礼までに王妃らしく見える礼儀作法やこの国の歴史なんかを勉強しなきゃないかい、これから大忙しだ。

……漫画描いてる暇あるかなあ。あるといいけど。

「話がまとまったのなら、ハルカに俺の血縁の者を紹介したいが、あいにく父母は諸国を旅している。連絡は入れておくから、まあその内帰つてはくるだろう。後で弟を紹介する」

とりあえず今すぐ先王陛下や王太后陛下にお会いする訳ではないらしいと分かつて、心の準備がまだできていなかつたわたしはちょっとほつとした。

「ハルカが心配することはないよ。お一人とも気さくな方だし

千花がわたしの心配を察したかのように、フォローしてきた。

そうか、それならちょっと安心した。

でも一人、会わなきゃいけない方が残つてゐるんだよね。

「……王弟殿下はどういう方なの？」

「シルヴィは今年十六になつた。少し気難しいところもあるが、まあハルカが心配することはない」

……でも、一応近い血縁なら、わたしの歳のこととか言わなきやいけないんだろうなあ。

それを若い殿下がなんと受け取るか、ちょっと心配だ。なんでも気難しいって言つし。

「ゼシリア、シルヴィを呼んでこい。こいつのは早い方がいいからな」

「かしこまりました」

いつのまにか控えていた地位のありそうな年かさの侍女がスカートを摘んでお辞儀をする。そして、王弟殿下を呼びに出ていつてし

まつた。

うわあああ、こ、心の準備が！

なんだか急に心臓がバクバクしてきたよ。

わたしが胸を押さえて深呼吸していると、それがおかしかったのか、カレヴィイが笑つた。

「そんなに堅くなるな。ティカ殿も言つたが、おまえはなにも心配することはない。未来の王妃として堂々としていればいいんだからな」

「堂々って……、ついさっき決まつたことなのに、そんな無茶な。わたしが不安な面もちでカレヴィイを見ていると、彼はわたしの頭を撫でてきた。

……一応、わたしはカレヴィイよりも年上なんだけど……。

そんなことを思つてゐるうちに、ゼシリアと呼ばれた侍女が戻つてきて、程なくシルヴィイ殿下がお越しになられます、と伝えてきた。このゼシリアという人、結構地位がありそうだと思つたら、侍女長なんだって。

なるほど、どうりで妙な威厳があると思つた。

それからすぐに、シルヴィイ王弟殿下が来られたといつことで、わたしは一気に緊張してしまつた。

執務室に入つてきた人は、カレヴィイと同じ銀髪と彼よりもやや薄い青い瞳の持ち主の少年というか、青年だつた。

褐色の肌のカレヴィイと比べて、色素は薄いらしく色白だ。

「お呼びですか、兄王」

十六という年齢にそぐわず、シルヴィイ殿下はなんだかしつかりした印象を受ける。

後で知つたことなんだけビ、この大陸では十五で成人と見なされるらしい。

「ああ。この度、俺の婚約者となつた娘をおまえに紹介したいと思つてな」

カレヴィの言葉に、シルヴィ殿下は瞳を見開いた。

それに構わず、カレヴィは続けた。

「名はハルカ・タダノ。歳は二十歳といつゝにしてあるが、実は二十七だ」

わたしの実際の歳を聞いて、殿下は黙つていられなかつたらしく、少々怒りを含んだ口調で言つてきた。

「兄王、婚礼を挙げる予定だつたのは、ディアルスタンの王女では？　この方は他の大陸の方に見受けられますが。それに王の花嫁が二十七とはどういうことです」

確かに、彼の憤りは分かる。

それも兄の相手がこんな冴えない女なんだから。

「ティアルスタンとの縁談は残念ながら破談となつた。……だが、このハルカはティカ殿の友人だぞ。王妃とするのに不足はあるまい」

「ティカ殿の……」

そこでシルヴィ殿下が千花の顔をまじまじと見つめた。

それに対して、千花はなんだか氣乗りしなさそうに頷いている。

……ああ、そうか。

それでわたしは氣がついてしまつた。

わたしを王妃にとカレヴィが言つたのは、最初は腹立ち紛れからだつたからかもしれない。けれど、途中でわたしとの結婚に乗り気になつたみたいのは、わたしが千花と友達だつたからなんだ。たぶん、わたしがカレヴィと婚礼を挙げれば、千花はわたしのために最強の女魔術師としてこの国に協力することになるのだろう。

……そつか。

別にわたし自身が必要とされてる訳じやないと分かつてしまつて、

わたしあはなんだかがつくりしてしまつた。

そりやそうだよね。

わたしには王妃にふさわしい美貌も気品も教養もないもの。でも、元々が喪女だつたわたしだ。

わたし自身に期待されることは慣れきつていてる。

それでなんとかわたしは気力を持ち直すと、笑顔でシルヴィ殿下に手を差し出した。

「はるかです。よろしくお願ひします、殿下」

「うちの礼儀作法はよく知らないので、彼に笑顔で握手を求める」と、困惑しながらも殿下は素直にわたしの手を握り返してきた。

「それとわたしはどうが立つてますが、一応清らかなので王妃となるのは大丈夫ですよ。わたしはこれまで男性にモテなくて恋人もいませんでしたから」

それを聞いて、シルヴィ殿下がなんとも言えない顔をした。  
あれ、わたしまた変なこと言つたかなあ。

そしたら、カレヴィイが渋い顔をしてわたしに言つてきた。

「ハルカ、そんな余計なことは言わなくていい」

「え、そう？ 結構重要な事実だと思うんだけど」

わたしがカレヴィイにそう言つていると、シルヴィ殿下は困惑した  
ように言つた。

「そ、そうですか。それでは俺のことはシルヴィと呼んでください。  
それから、あなたの義弟になるわけですから、兄王より丁寧な言葉  
遣いでは困ります」

「あ、そうだね」

彼の言つことももつともなので、わたしはあっせつといつもの言  
葉遣いになる。

……じゃあ、お言葉に甘えて、彼のことはシルヴィと呼ばせても  
らおう。

「それじゃ、よろしくねシルヴィ」

わたしがにっこり笑うと、それまでいくらかうろたえていた彼が  
ほほとしたように笑つた。

……うーん、可愛いな。

実はわたし弟が欲しかったんだ。

彼とは仲良くなれるように、暇を見て時々会いに行こう。

そんなことを考えて、にこにこしているわたしに、カレヴィイがい

きなりの爆弾発言を発してきた。

「それでだな。挙式の予定だが、一ヶ月後とすることにした」

ええっ、それっていくらなんでも早すぎない？

礼儀作法のこともあることだし、せめて三ヶ月は余裕を見てほしいんだけど。

でも、國民に近々挙式するつてことを知らせてあるんじゃやつぱり駄目なのがなあ。

……やっぱり、わたしうまい話に食いつきすぎたかもしれない。

などと思つても、後悔先に立たず。

ちょっと心配そうな千花の視線を受けながら、わたしはひきつり笑いをしていた。

「そんなに早く？ ちょっと早すぎない？」

この奇妙な状況を両親に説明して、会社も辞めなきやならないわ  
たしはカレヴィイに食い下がつた。

「……なにか困ることでもあるのか？」

カレヴィイが眉を上げて見てきたので、わたしは素直に伝えた。  
「会社をすぐに辞められるか分からぬし、そんなに急に王妃にな  
るもの、わたし自信ない」

できれば円満退社にしたいし、一ヶ月やそこらで礼儀作法が身に  
付くとは到底思えない。

「はるかの不安は分かるよ。準備するにもちょっと期間が短すぎる  
ものね。……カレヴィイ王、その辺りはどうにかならないのですか？」  
わたしのこぼした不安に千花は頷いた後、カレヴィイに交渉してく  
れる。

「期間が短いことは分かっている。だが、国民に婚礼が間近にある  
ことを知らせてしまつては、なるべくなら日程は変更したく  
ない」

「……そつか、そうだよね」

カレヴィイにはつきりと断られてしまつて、わたしはちょっとがつ  
くり。やつぱり駄目かあ。

「悪いが、式は予定通り行う。なんならおまえの勤め先には俺から  
説明するが」

「え……」

カレヴィイの思つてもみなかつた申し出にわたしは目を見開いた。

いやでも、みんなにカレヴィイなんて言つて説明するの？ 真実を  
正直に話したら正氣を疑われかねないし。

「でも本当のこと話をわけにはいかないでしょ？ そこはうまく  
脚色とかないと。それにカレヴィイ、向こうのこと全然知らないで

しょ？ そんなんでうちの上司説得するとか無理があるんじゃないかな」

わたしがそう言つと、ちょっとカレヴィはむつとした。

ありや、機嫌をそこねちゃつたかな。

カレヴィが好意で言つてくれてるのはよく分かるし、それはすぐありがたいよ。

せつかくこう言つてくれてるのに悪いけど、でもカレヴィを職場に連れていくのはやつぱりやめた方がいいかもしないと思うんだ。千花はそんなわたし達の様子を窺いながら顎に指を当ててなにかを考えているようだつた。そして、おもむろに口を開いた。

「それなら、わたしも付いていつてその都度カレヴィ王に遠くから指示することにすればいいんじゃないかな？」

おお、それはいいアイデアだ。千花、ナイス。

カレヴィもそれはわたしと同じだったみたいで、納得したように頷いた。

「それはいい考えだな。ティカ殿、ぜひ頼む」

……となると、カレヴィを職場に連れて行かなきゃいけないんだよね。

うーん、でもそれって、わたしこんなイケメンと結婚するんです！ つてみんなに見せることになるんだよね。

今まででなかつたわたしが突然イケメンを連れていつたうどうなるか、想像しただけでも恐ろしい。

できればカレヴィが出てこない方向で、上司にわたしの退職を納得させたいけど、たぶん無理だろうなあ……。

そう考えてわたしがちょっと息をついていると、カレヴィがわたしの肩を励ますように軽く叩いた。

「そういうことだから、ハルカは安心している。ティカ殿の協力もあることだしな」

わたしの溜息を不安感からのものと勘違いしたらしいカレヴィは笑顔で言つてくる。

「う、うん」

仕方なくわたしが頷くと、それまで黙っていたシルヴィも後押しするように言った。

「兄王がいつも言っているのです。ハルカはもう少し気持ちをゆったりと持つて兄王に任せなければいいんですよ」

「う、うん……」

未来の義弟にまでいつ言われちゃもつ反論の余地もない。わたしはまた頷いた。

ああ、できれば穩便にことが済めばいいなあ、とか思つてたけど、これはちょっと無理っぽい。

けど、自分で決めたことだから仕方ない。

千花もわたしのために動いてくれることだし、ここは頑張ろう。とりあえず、その前に両親にカレヴィとの結婚を知らせる難題が待ち受けているけどね。

そして、カレヴィの王妃になることが決まったわたしには、彼の部屋の隣の王妃の間が与えられることになった。

まあ、隣と言つても間に共同スペースみたいなものがあつて、王と妃が一緒に過ごすときはそこを使うらしい。

この大陸ではどここの国の王宮もこの作りだと千花に教わった。千花はその能力でいろんな国に行つていろいろなことを知るに当たつて、すごくいい先生だ。

「はるか、今日は積もる話があるから泊まつていきたいんだけどいい？」

千花がそう言つてきたのをわたしは喜んで受け入れた。

ああ、ひさしひに千花とお泊まりかあ。千花のこれまでの生活のことも聞きたいし、すごくわくわくする。

すると、なぜかカレヴィが渋ってきた。

「なにも俺の婚約者になった今日でなくともいいだろ。ティカ殿

とは別の機会に……」

「カレヴィイとはまだ結婚してるわけじゃないんだからそのくらいいいじゃない。本当に千花とは久しぶりに会ったんだから、たくさん話したいことがあるし」

「しかし、今夜は……」

そう口を挟んできたシルヴィイをカレヴィイが片手で押しとどめると、仕方なさそうに溜息をついた。

「仕方ない、今夜だけだぞ」

「あ、ありがと。それで、明日は次の日に会社に行くから家に泊まるね」

そう言つたら、なぜかカレヴィイがひきつったような顔をした。そして、それをシルヴィイが気遣うように見ている。

あれ、なんかまずいことでもあるのかな？

「……どうかした？」

千花もそんな二人の様子を不思議そうに見ている。

「いや、なんでもない。明後日にはハルカはこちりに住むところとで間違いないんだな？」

「うん」

……まあ、会社の上司の説得がうまく行けばの話だけだ。

とは、思つてもわたしは口に出さなかつた。

それを言つたら、千花のお泊まりがなくなりそうな予感がしたからだ。

カレヴィイ達の様子はちょっと気にはなつたけど、わたしは目の前の千花とのおしゃべりのことについてぱいで、すぐにそれを忘れた。

……ああ、本当に楽しみだなあ。

これから気の重い両親と職場の説得が待ち受けているんだし、とりあえず楽しいことで気を紛らわそう、うん。

それでわたしは今、わたしにあてがわれた寝室に千花といた。で、二人とも寝間着に着替えて、一緒に天蓋付きのベッドの上に座り込んでいる。

絹の寝間着は千花の綺麗な体の線を露わにしていて、友達のわたしでも惚れ惚れする。

出るところは出てて、手足は細くて長いつていいなあ。格好いい。

「……まず、はるかに謝らなきやいけないことがあるんだ」

千花が改まってわたしに向き合ってきたので、わたしはちょっとうろたえる。

「な、なに？」

「召喚の座標指定を失敗したっていのは実は嘘なの。わたしは、わざとあそこにこなむかが現れるよつてし向けたの」

「え……」

にわかには信じがたい話に、わたしの頭が理解を拒否する。

「うそ……」

じゃあ、千花がわざとわたしとカレヴィイが結婚するよつてし向けたつてこと？

「本当にじめんなさい！」

千花はベッドの上で上座する。対するわたしは信じられない事実に呆然としているだけだった。

「な、なんで……？」

とりあえずそれだけ絞り出すと、千花は顔を上げた。

「今回カレヴィイ王と結婚する予定だったディアルスタンのリリーマリー王女は既に想い人がいたの。それは王女の守護騎士なんだけど」

なになに、王女と騎士の恋！？

それに対するわたしの反応は素早かつた。 なにを隠そう、今わたくしが描いている漫画は騎士と姫君の恋物語だ。なので、わたしはその話にものすごく興味を引かれてしまった。

「 詳しく聞かせて」

わたしは千花に詰め寄つて肩をがしつと掴むと、目を輝かせて彼女を覗きこんだ。

千花はそれに若干引き気味になりながらもちゃんと説明してくれた。

「 王女の守護騎士の方も、彼女を憎からず想つていてね。 そのうちディアルスタン国王に思い切つて結婚したいと申し出るつもりだつたらしいの」

「 あらー……」

わたしは思わず氣の抜けた声を出してしまった。

だつて、それじゃカレヴィイ、思い切り邪魔者じゃない。

物語的にはおいしいけど、ディアルスタンの王女と騎士はさぞ焦つただろう。

下手したらそれつて、一人の愛の逃避行フラグだよ。

「 でも、王の方はそんなことは全く気づいてなかつたから、王女とカレヴィイ王との婚約話を進めちゃつたのよね。カレヴィイ王も今まで執務に明け暮れてたけど、重臣達にせつつかれて、そろそろ結婚しないとまずいと思つたらしくて、その政略結婚を決めたらしいのね」

「 政略結婚かあ。よく知らないわたしに結婚しろって言つてくるくらいだもんね。 それくらい平氣でするよね」

まあ、あの時のカレヴィイは、ほとんど決まりかけていた婚礼を目の前で駄目にされて頭にきてたんだろうけど。

それにして、カレヴィイは王女がどんな人物でも一向に構わなかつたつてことか。わたしはその王女じゃないけど、なんか失礼だな。わたしも人のことは言えないけど、本当に恋とか愛は必要ないんだな。結婚するはずだった王女が可哀想だ。

……けど、王なんだから、結婚するに当たつて相手の「」といふくらい調べない？

そうすれば、王女とその騎士が恋仲なくらい分かりそなものだけ。

そしたら、さすがにカレヴィイもリリー・マリー王女と婚約しようとしないはずだ。

「それで今回、リリー・マリー王女からわたしにどうにかしてほしいって依頼があつて。けど、あまり時間がなくてどうしようかと思つてたんだけど、婚礼契約書にカレヴィイ王がサインしなければこの結婚は成立しないことになるのよね。それで、そこに印を付けたの」

「……それはわかつたけど、なんでそこにわたしが召喚されるの？」突然召喚されたことにすれば、契約書が滅茶苦茶になつても不自然じやないかなと思つて。それにはるかなら、カレヴィイ王とうまくいくかもしないなつて思つたし

「ええっ？ 千花、なに言つてるの？」

いきなり千花が妙なことを言い出したので、私はびっくりする。わたしとカレヴィイならうまくいくかもつてなんだ。仮にもカレヴィイは王様で、わたしはただの一般庶民（それも喪女）だぞ。

悪いけど、それは千花の思い違いじゃない？

「一人とも自分の恋愛には頓着しないタイプじやない。愛のない結婚が耐えられない人もいるけど、その点、はるかなら大丈夫だと思つたし。だから、わたしはその可能性にかけたの」

まあ、確かに結婚に夢も希望も持つてないけどね。千花、鋭すぎる。

「でも、本当にカレヴィイ王に手を出させるつもりはなかつたんだよ？」それだけは信じて

まあ、それだとカレヴィイが可哀想すぎる氣もしたけど、最強である千花なら可能なんだろうな。

「うん、分かつてゐる。……千花、もしかしてわたしの行く末も心配してくれてた？」

わたしがそう言つと、千花はちょっとうろたえた。……図星があるにわたくしも一生一人でも別にいいと思つてはいたけどね。そうか、我が道を行くわたしは、そんなに千花に心配をかけてたのか。ちょっと反省。

「……恋愛面はともかく、カレヴィ王は悪い人じやないから。はるかが不幸になることはないと思つたんだ。本当にごめんな、はるか」そう言つと、もう一度千花は深々と頭を下げる。

「別にいいよ、千花がわたしのこと心配してくれてるの分かつたし。千花はこのこともう気にしないで。……それに生活面もものすごく保証されてるしね」

いたずらっぽくわたしが笑つて言つと、千花は安心したよつて息をついて、「うん」と頷いた。

千花によると、わたしとカレヴィがある程度打ち解け、お互いに信頼関係が築けたところで本当の意味での結婚生活を送つてもらう計画だったそうだ。

でも、どうしても反りが合わなそうだつたら、婚約話を白紙に戻すつもりだったとも言つていた。

「……でもそれだと、わたしに話が有利すぎない？ なんだかカレヴィがいいように利用されるみたいでちょっと可哀想な気がする。カレヴィも、わたしを娶ることで千花の力を借りようつていうんだからお互い様かもしれないけど。」

でも千花のわたしに対する気遣いは、わたしの「子供産んでもいいよ」発言で無になつてしまつたわけだけど。

千花の気持ちは嬉しいけれど、やつぱつこいつのはフェアに行かないとね。

翌朝。千花とわたしとカレヴィは一緒に朝食をとりながら、これ

からのこと話をしていた。

「とりあえず、一回家に帰つて事情を話しておきたいんだけど。会社にも辞めるつて言わなきやいけないし」

「あ、そうだね。それがいいよ。わたしもはるかの家にお邪魔するから」

千花がわたしの言葉に同調してくれたことで、わたしはちょっと癖のある両親の説得に千花といつ味方を得られて、かなり心強かつた。

「うちの両親は千花の言つことならたぶん信用するだらうし、それにこやとこやとときには千花に魔法を披露してもらえばいいだらう。うん、そうしてくれると助かる」

いきなり異世界の王様のところに嫁にいくつて言つたら正気を疑われかねないから、千花が同行してくれるのは本当に助かった。

「……俺も行かなくていいのか？」

カレヴィは執務とかでいろいろ忙しいらしいんだけど、でもわざわざそう言つてくるのは、かなり気を遣つてくれてるんだろうな。「どうしても必要だつたら出てきてもらつかもしぬないけど、今のところ大丈夫だよ。うちの両親はここに直接来てもらつて理解させるつもりでいるし」

彼氏もいなかつた娘が異世界の王様と結婚するなんて、普通だったら到底信じてはもらえないだろうけど、そこは千花がいるし、丈夫だよね。

「……問題は会社かなあ」

わたしは焼きたてのパンにバターを塗りながら溜息をつく。

「そうだね。いきなりやめます、はい分かりましたつて訳にはいかないものね」

千花もスクランブルエッグをフォークですくいながら同意した。

「うーん、急ですけど外国に嫁ぐことになりましたつて言つたら、認めてくれるかなあ。一応他の子になにかあった時のために仕事内容は教えてはあるんだけど」

ていうか、結婚すること自体信じてもらえないやうな気がするの  
は、わたしの気のせいだろうか。

なにしろ、わたしがもてなくて彼氏もいなかつたことは職場に漫  
透しているしさ。

「ではそこで俺を呼べ。必ず認めさせてやるから」

「おお、力強いお言葉。カレヴィイがそう言つて、なんとなく可能な  
気がしてくるから不思議だ。」

「そう? ジヤあ、そうしようかな。カレヴィイ、その時はお願ひね  
「ああ、まかせておけ」

そう言って爽やかに笑う顔はマジでイケメンで、なんで結婚相手  
が喪女のわたしなんだと思わざるを得ない。……まあ、手近にいた  
のがわたしで、たまたま最強の魔術師の千花の友人だったからとい  
うのは理解はしているけど。

でも感情面ではいかんともしがたく、なんとなくもやもやしつつ  
も、わたしはとりあえず帰宅することにした。

千花の異世界移動魔法で「あらの世界の自分の部屋に移動してきましたわたしは、まず適当な服を選んで着替えた。

昨日になくなっていた間、千花の家に泊まっていたことにするためだ。

言い訳するのに、いくら外見に頼着しないわたしでも、さすがにあのよれよれのジャージで外出はしないからそうしたんだけど、着替える間、千花はわたしの汚部屋を整理整頓してくれた。……う、ありがたい。

それで改めて着替えたわたしは、家の鍵とバックを持つて家の外に千花の魔法で移動した。

……家にいるのに、また外から入るつてのも、なんかすごく間抜けな感じがしないでもないけど仕方ない。

おとんとおかんにはわたしが昨日になくなつてたのは分かっているだろうし、ちょっと情けないけどこれは苦肉の策だ。

「……ただいま~」

家の鍵を開けて中に入ると、リビングからおかんが飛びってきた。

「……はるか?」

「おお、素早いな。……」応わたしのこと心配してくれてたんだろうか。

「連絡もしないで、今までどこ行つてたの。携帯は通じないし、まったくあんたつて子は。頼みたい用事がつたのに」

「なんだ、結局わたしよりもその用事の方が大事なのか。

おかんからのこついう仕打ちは幼少から受けているけど、やつぱりちょっと落ち込む。

「まあ、いい加減、わたしもこついう人なんだと理解して受け流せばいいんだけどね。」

でも、理性では分かっていても感情が付いていかなことってあるでしょ？

それがまさここの時プチ爆発して、わたしはむつとしてしまった。

おかんの上からの物言いにわたしが黙り込んでいた、そこで千花がフォローを入れてくれた。

「おばさん、お久しぶりです。すみません、はるかはわたしの家に泊まつてたんです。心配をおかけしてすみませんでした」

申し訳なさそうに頭を下げて謝る千花を見て、おかんは驚いたようだ。まあ、千花は結婚して外国に行つてることになつてからね。

「まあ、千花ちゃん、また綺麗になつて。いつ帰ってきたの？」近所でも美人で出来がいいと評判の千花に久しぶりに会つて、おかんはころりと機嫌がよくなつた。

……ちょっと、ぐれてもいい？ それには十年ぐらい遅すぎる貰もするけど。

「つ、タベです。それで、はるかに会いたくていきなり呼び出しちゃつたんですけど、本当にすみませんでした。だから、はるかは全然悪くないです」

「まあ、それじゃしようがないわね。でも、はるかは今度からそういうときは連絡入れときなさいよ」

「……分かった」

おかんの小言に内心うんざりしつつも、ここで逆らつとまたうるさいので、とりあえず頷いておく。

「ち、千花ちゃん上がって、上がって。すぐにお茶出すから」

おかんは上機嫌で千花を促すと、「お父さん、千花ちゃんが帰ってきたわよー」とリビングに戻つていった。

……なんていうか、娘のわたしと千花との扱いの差が激しそう。確かにわたしは出来の悪い娘だけどさ。

「……おばさん、なんというか相変わらずだね……」

千花が同情するように言つてきたのをわたしはただ苦笑いして受

け止めた。

改めて自分の評価を親に突きつけられた気がして、非常に情けなかつた。

「……それについても、『ごめんね。わたしが召喚したせいで、いろいろ迷惑かけて。おばさん達にも心配かけちゃったし、すぐに帰せばよかつたね』

千花が眉を下げる申し訳なさそうにわたしに謝つてきました。  
美人の千花にそんな顔をされると、こっちが悪いことをしたように思えてくるから不思議だ。

「別にいいよ。うちの親がいい歳した娘を干渉すぎるんだよ  
……とはいって、連絡の一つもすればよかつたな。

携帯の電波くらい千花ならどうにかできただろうし、それは失敗だつたなと思つ。

まあ、過ぎてしまつたことは仕方ない。次は気をつけよう。  
「それより、千花上がつてよ。千花には説明頑張つてもらわないと  
いけないし」

そうなのだ。

情けないことに、わたしでは通常の結婚話すら信じてもらえない可能性が高いので、千花の存在は不可欠なのだ。

「うん、お邪魔します」

千花は頷いて玄関を上ると、わたしの後に付いてリビングに入つた。

「おじさん、お久しぶりです」

千花はおかんに比べるとちよつと影の薄いおとんに笑顔で挨拶した。

千花のその様子はとても爽やかで感じがいい。

「千花ちゃん、久しぶりだね。元気だったかい？」

「はい、おかげさまで。タベははるかをお借りしちやつてすみませ

んでした

「うん、いいんだよ。じつこいつがないことはほんかほんかひきこもつてゐるんだから」

……おとんもなにげに毒舌だよね。それにしても、どれだけ親の評価低いんだ、わたし。

わたし達はとりあえず、リビングのすぐ傍のダイニングテーブルでコーヒーを飲んでいた。

千花はおとんとおかんに外国での生活についていろいろ聞かれていたけれど、そのうちにわたしは業を煮やして無理矢理話を遮った。

「あ、あのさ、実は大事な話があるんだ」

「なに、まさか会社辞めたいとかじゃないでしょ? うな。この不景気に冗談じゃないわよ」

う、いや、それも含まれてはいるんだけどね。

わたしが「」もると、おかんの目がつり上がる。

おかんがなにか言おうとする前にわたしは慌てて言った。「じ、実は今度、わたし結婚することになったんだ」

すると、おとんとおかんがうろんな目でわたしを見た。

……まあ、今まで男の影がなかったわたしの言つことを一人が信じられなくとも仕方ない。

「本当です。あの変なことを言つと思われるでしょ? けど、聞いてください。はるかは異世界の王様の花嫁になることになりました」この近所の人の評価が抜群に高い千花のその言葉に、おとんとおかんの目が点になった。

「あの……、千花ちゃん? どうしちゃったの? はるかならともかく、千花ちゃんがそんなこと言つなんて……」

わたしならともかくって、どういう意味だ、おかん。

いくらファンタジー漫画を描いているわたしでも、現実と空想の区別くらいはついているぞ。

「信じられないのも当然ですね。……実はわたし、その異世界で魔

「術師をしています」

見てください、と千花は言つと、その手から明るい球体を出した。……もしかして、これが昨日千花が言つてたあかりを灯す魔法なのかな？

千花はふわふわ浮かぶその球体をいくつもその手から出した。それをおとんとおかんが釘付けになつて見ている。

「……千花ちゃんは手品師なのかな？」

おとんが間の抜けた顔で聞いてくる。まあ、魔術師＝手品師と受け取つても不思議じやない。

「違います。言つなれば、魔法使いですね。……よく見ててください」

千花はあかりの魔法を消してから椅子から立ち上がると、瞬間的にリビングにあるテレビの傍に移動した。

それをぽかんとして見る、おとんとおかん。

……まあ、信じられなくとも無理はない。わたしもこんな事態にならなければ、到底信じられなかつた。

千花はまた瞬間的にテレビの傍からもう一度元の場所に戻つてくる。

それをおとんとおかんは少し恐怖の入り交じつた目で見ていた。

「……信じていただけましたか？」

その視線に少し寂しそうな笑顔で千花は尋ねる。

「そ、そんな馬鹿なことが……」

おとんが千花に事実を突きつけられても、まだ信じたくないというように呟いたけど、千花がそれに対して強く頷いて言つた。

「あるんです。これからその王様のところに移動してもらいますが、玄関で靴を履いてもらつていいでしょうか？ できれば出かける支度をしていただけるといいんですけど。あと戸締まりもしてください

い

「あ、そうだね。ガスの元栓も閉めとかなきや」

呆然としているおとんとおかんを後目に、わたしは家の戸締まり

を開始した。

二人は果然として今は使い者にならないし、わたしが率先してやるしかない。

「おじさん、おばさん、信じられないかもせんが、これは本当のことです。すみませんが、準備してください」

千花がおとんとおかんに向かって右手を広げると、二人はふらふらと自分達の部屋に行き、よそ行きの服に着替え始めた。

……もしかして千花がなにかしたのかもしれない。

おとんとおかんは玄関で靴を履いたところで我に返つたようだつた。

すっかりよそ行きの格好になつている自分達におとんとおかんはうろたえた。

「……これはいつたい……」

「千花ちゃん、どうなつてゐるの、これ」

「すみません、説明は後で。……はるか、行くよ」

「うん」

千花に促されて、わたしも慌てて靴を履いた。

……しかし、さすがに四人も玄関にいると狭い。

けれど、それを気にする様子もなく、千花は短く何事かを唱える。すると、その次の瞬間にはわたし達は豪華絢爛な広間に移動していた。

ザクトアリアなのは分かるけど、えーと、「……はどこだるや……？」

## 010 カレヴィとの面親の謁見

千花に連れられて来たといひは、今まで一度も見たことのない場所だった。

……まあ、もつともカレヴィの執務室と居室、その間の共同空間と王妃の部屋くらいしかまだ行ったことないんだけどね。もう少しわたしもこの王宮の間取りを覚えた方がいいかもしだい。

とは言つても、この中はとんでもない部屋数らしいんだけじね。でも、所要な施設の場所くらいは覚えた方がいいだろつ。

「来たな、ハルカ」

その声のした方を見ると、一段高くなつたといひにある豪華な椅子にカレヴィが悠々と腰掛けていた。ひょつとしてあれは玉座だろうか？

「ここは……？」

わたしが疑問を口にすると、おじさん改め、宰相のマウリスがそれに答えてくれた。

「ここは謁見の間ですよ、ハルカ様」

言われてみれば、確かにそれっぽい。わたしはなるほどと納得した。

ここの謁見の間は絢爛豪華ではあるんだけど、不思議と下品な感じはしない。それは所々置いてある品のある調度品のおかげかもしない。

「ハルカ、そちらにいるのがおまえの父母か？」

玉座の上からカレヴィが声をかけてくる。それにわたしは頷いた。

「うん、そう」

うん。こうしてると、カレヴィ、確かに王様らしく見えるね。なんというか、王様！ というオーラみたいなものがある。

そこで初めておとんとおかんは我に返つたらしくて、見慣れない

豪華絢爛な謁見の間と、若いけれど威厳のある人物を目の当たりにして、落ち着かなさげに視線をさまよわせていました。

「 そ う か。 …… 俺 は ザ ク ト ア リ ア 王 国 の 国 王 カ レ ヴ イ だ。 こ の 度 は る か を 花 嫁 に 迎 え る こ と に な つ た。 今 後、 よろしく 頼 む 」

「ま、まの」

威風堂々としたカレヴィに対し、おとんは気の抜けた返事をした。  
……まあ、今まで一緒に暮らしていた娘が、突然異世界の王様の  
花嫁になるなんて訳の分からぬ状況になつたわけだし、この反応  
は無理もないだろう。

一応反応したおとんはまだいい方で、おかん  
コノヅイの罪は懲り罰つていいから、二ナ、二つ、一

「ハルカ、隣に座れ

おとん達と一緒にいたわたしは、カレヴィに隣の席を示されてちょっと驚いてしまった。

てないぞ。

え、いの？」

構わない。おまえは一月後に「俺の姫になる」遠慮するな。

わたしはカレヴィの言葉に従つて、一段高くなつたところに上が

り、カレヴィの横の豪華な椅子に座つた。

そしておどんとおかんの方は向くと二人は信じられないものを目にするかのように、並んで座っているわたしとカレヴィを呆けて見ていた。

それを千花がちよつと離れたところで様子を窺つてゐる。

異世界に来てしまえばもうこっちのものだし、大体おとん達を説得できたも同じだから、千花には感謝だね。

「今言つた通り、一月後にはハルカは俺の花嫁になる。そなたらも  
そのつもりでいてくれ」

「……まあ」

おとんとおかんは未だに信じられない様子で、間の抜けた返事をする。

「……やつこいつですか、今現在はるかが勤めている会社は辞めてもうらづことになります。その代わりと言つてはなんですが、わたしが新たに会社を設立して、はるかをその事務員としていたしましたから、経済的な心配はいらないと思います」

「千花ちゃんが会社を……」

千花の説明にぽかんとするおとんとおかん。結婚しているとしても、まだ二十代の千花が会社設立つていうのは驚愕に値するのだろう。

でもこれは、わたしが異世界で王妃になるよりも現実的だと思うぞ。

「ティカ殿。そのことなんだが、ハルカにかかる費用はザクトアリアから出すことにしたいのだが」

「そうですね。はるかは王妃になるのですし、その方がいいかもしれませんね」

カレヴィの提案に千花は頷いて了承した。

そうか、わたしの給料はこの国から出るのか。まあ、それが一番妥当だろつな。

千花にも変な負担はかけたくないし。

でもそうなると、わたしも趣味だけにかまけてられないな。王妃の仕事も頑張らないと。……今のところ、どんなことをやらなければいけないのか全然分かつてないけれど。

まあ、それは後でカレヴィとか侍女長のゼシリアに聞けばいいか。「……ハルカの父母はなにか言いたいことはないか？ あれば答えるが」

カレヴィのその言葉に、おとんははつとして言つた。

「お、恐れながら、どうしてはるかが王妃に選ばれたのでしょうか？ この娘は容姿は普通ですし、性格も決して気の回る方ではない。友人には恵まれていますが、そう社交的でもない。それなのに、な

ゼですか」

すると、今まで呆然としていたおかんもそれに便乗するように言った。

「そ、そうです。王様ならもつと若くて綺麗な方を選び放題でしょう。それなのに、なぜよりによつてこんな娘なんですか？　わたし共にはとても理解できません」

……一人とも、ここぞとばかりに言いたい放題だな。一人が普段わたしのことをどう思つてるかよく分かつたよ。

わたしが思わずむつとしてると、カレヴィイが椅子の肘掛けに置いてあつたわたしの手にその手を重ねてきた。

「王である俺が、ハルカを選んだのだ。それに文句があるのか」

カレヴィイが威圧的にそう言つと、おとんとおかんはかなりびびつたようだつた。そして、それ以上言つ氣もなくなつたようで、口を噤んでしまつた。

「……もつこのことに対する意見はないな。それでは、これで謁見は終了とする。ハルカの父母は別の間で休むよつて。……ハルカ、来い」

わたしは席を立つたカレヴィイに手を取られて立ち上がると、彼にぐいぐいと引っ張られた。

彼の表情をそつと窺うと、顔が険しい。

……なんか、カレヴィイ結構怒つてるみたいなんだけど。

ひょつとして、おとんとおかんの話を聞いて、変な女を掘まされたとでも思つてゐるのかなあ……？

それだと、王妃業の傍らに趣味三昧の生活が泡になつて消えそうな気もしたけど、でもわたしが千花とザクトアリアの繫ぎということがあるから、カレヴィイも王の立場からしたら簡単には婚約は取り消せないはずだ、……けど。

……うーん、困つたなあ。

一ヶ月後の婚礼については早すぎると思ってたけど、でもここでカレヴィイにやっぱり気が変わったとか言われたら、それはそれで困

る。

それじゃ、おとんとおかんに後でなんと言われるか分からぬ。

わたしは困惑しながらも、市場に売られていく子牛の「」と、複雑な気分でカレヴィに手を引かれて行った。

## 011 憤るカレヴィイ、舞い上がる両親

わたしは機嫌の悪そうなカレヴィイに、そのまま謁見の間の控え室みたいなところまで強引に連れていかれた。

そしてカレヴィイはわたしと向き合つ。

「こんなことは言いたくはないが、なんだ、あの両親は」

「……あれ、別にわたしに怒つてているわけではないんだ。

わたしは思わず気が抜けて、カレヴィイの端正な顔を見返した。

「……俺は、このことに対してもおまえの父母からの怒りを受ける覚悟もしていたんだぞ」

「え……、なんでおとん、じゃなかつた、父と母が怒るの？」

カレヴィイの思つてもいなかつた言葉に、わたしは思わずぽかんとしてしまつた。

「普通は、異世界などとこゝ訳の分からないとじりに大事な娘をやりたくないはしないだろうが」

あー、普通はそうなのか。

まあ千花が言うには、うちの両親はちょっと特殊らしいし。

「……でもたぶん、一人ともまだ状況がはつきり把握できていないだけなんじやないかな。だから失言みたいなことしちやつたんだと思つし」

おとんとおかん、謁見の間中呆然としていることがほとんどだったものね。

それがいきなり威厳のあるカレヴィイに意見を求められたら、それはうろたえるだろう。

でもまあ、あれは娘の結婚相手に対する失言だらうナビ、まい」ことなきあの二人のわたしに対する本音なんだらうな。

……そう考へると、なんだかちょっと落ち込んできた。

おとんとおかんがあの調子なのはいつものことなんだから、いい

加減わたしも慣れというか、諦めればいいのに。

でもそれでもやつぱり、この歳になつても親には認められたいんだろうか。

「それがなんだ。娘のことをあげつらうような真似をして。親なら娘の長所くらい分かつていそうなものだわ」

「あー、カレヴィイわたしのために憤つてくれてるんだね？」

彼に惚れるまではいかないけど、これにはちょっと感動した。

カレヴィイ、なんだかんだ言つていい人だな。

千花しかり、親よりも血の繋がりのない人の方が信頼できるつてなんだかちょっと淋しくもあるけれど。

「……未来の王妃をあそこまで言われて黙つているほど、俺は薄情ではないつもりだぞ」

「うん、ありがと。……でもわたしの長所つて自分でも思いつかないなあ。だからうちの両親がそういう物言いになつたのも仕方ないと思うよ」

わたしがそう言つと、カレヴィイは顎に手を当てて少し考え込んだ。「ハルカの長所は、おおらかなところじゃないか？　たまに卑屈な発言も混じるが」

「……卑屈？」

カレヴィイの言つてこる「」とがよく分からなくて、わたしは首を傾げた。

「自分はもてない女だと豪語していたじゃないか」

ああ、あれね。

「いや、実際もてなかつたし。だから、そう言つただけなんだけど胸が大きいせい変なセクハラはされるけど、もてた覚えは全然ない」

「それはやめる。おまえの容姿はおまえが言つほど酷くない。それに、おまえは俺の妃になるのだから、そんなことはもう関係ないだろ」

「うん、まあ。そうだね」

わたしはカレヴィのその言葉にこくりと頷いた。

王様でイケメンなのに、気さくでこういう気遣いができる彼は、結婚相手としては、これ以上は望むべくもないのだろう。

……ただし、突然現れたわたしをほとんどやけくそで王妃に据えようとしたことをからむ、結婚に対するやる気がほとんど皆無だということが分かる。

後でわたしが千花と友達だつて知つて、この結婚が国益になるつて理解した途端、やたら乗り気になつたけどさ。

たぶん、カレヴィはわたしと同じく愛や恋というものをあまり重視していないのかもしれない。

そんなことを漠然と考えていたら、カレヴィはわたしが頷いたことで、ほつとしたようだつた。

「……それでは、ハルカの両親と合流するか。ハルカはまた着替えてこい」

「え、このままでいいよ  
いちいち着替えるの、めんどくさいし。

この世界の格好じゃないけど、一応それなりの服装をしているんだからこれでいいじゃない。

わたしは断つたけれど、カレヴィがそれを許さなかつた。そして、有無を言わさない口調で言つた。

「ハルカ、着替えろ」

カレヴィの命令で大急ぎで自分に与えられた王妃の間に戻つたわたしは、侍女達に例のキラキラした衣装に着替えさせられた。

あ、そうだ。

そういうえば、明日会社辞めるつて言つに当たつて、用意するものがあるんだつた。

わたしがそれまで「うつかり忘れていたのは、会社の人に配るお菓子。

急だつたから無理かなあと思つたけれど、ゼシリアに一応言つてみたら、『ご自宅に帰宅される前には』用意致しますと言つてくれた。

わあ、ゼシリア、有能すぎる。

「ありがとう。助かる」

わたしが感謝の言葉を彼女に伝えると少し困惑したよつてゼシリアは言つた。

「わたくしは当然のこととしたままでですから、そんなもつたいたいないお言葉など、わたくし」ときにおかけにならないでください」

「いや、でも嬉しかつたし。本当に助かつたし、ゼシリアありがとうね」

わたしがにこり笑つて言つて、「ありがたいお言葉、ありがとうござります」と少し困つたようにゼシリアが微笑んだ。

……うーん、王妃となる身分の者はやたら侍女に礼を言つものじやないのかな？

でも、こいつのことは身分どおりに関わらずこくへら言つてもいいんじゃないかとわたしは思つんだ。

それで、支度を終えたわたしは、ゼシリアに案内されておとんとおかんのいる部屋に通された。すると既にそこには千花の他にカレヴィも来ていた。

中央の大きなテーブルには、おいしそうな料理と中身はお酒と思われるデカンターなんかが置いてあつて、それを皿にしたらなんだかお腹がすいてきた。

わたしの姿を認めたおとんとおかんは真つ赤な顔でふらふらとわたしに近寄つてきた。

「おお～っ！ はるか、そういう格好をするとまるで別人だぞ！ さすが未来の王妃だ！」

なにがさすがなんだかよく分からぬいけど、おとんとおかんは既

に出来上がっていた。

……なんで、よりによつてこんな場所でこんなに飲んだんだ。立派なよつぱりいじやないか！

「はるか、よくやつたわ！ またかあんたがこんな玉の輿に乗るなんて、まるで夢みたいだわ！」

そう言いながら、おかんは酒と思われるグラスをあおる。その様子をカレヴィイは呆れたように見ていた。

まあ、彼の気持ちは分かる。

さつきまで、おとんとおかん、カレヴィイに渴を入れられてたのに、それが一転してこの有様なんだもん。

「はるか、ごめん。ちょっとお酒でも入れて、気分をほぐしてもらってから説明しようとしたら、おじさんとおばさん、飲み過ぎちゃつて、こんなことに」

千花が申し訳なさそうに謝つてくるけど、どう考へてもこんなに正体を失うほど飲んだ本人達に問題があるだろ。ちょっとは自制しろ。

「侍女になにを用意したのか聞いたら、ルルア酒だつたそうだ。これは飲みやすいが、かなり強い酒だ」

カレヴィイは、強いと言つわりにはそのルルア酒なるものをくいくい飲んでいる。カレヴィイはお酒には相当強いみたいだ。

わたしはカレヴィイに促されて、彼の隣に座つた。

カレヴィイにルルア酒を注いでもらうと、一口それを含んだ。……

なるほど、フルーティで確かに飲みやすい。

そんなに強いお酒なら、ちょっと油断するとすぐ酔つぱりいそうだ。

そう思いながら、わたしはおいしい料理を肴にルルア酒をちびちびやついていたら、またしてもおとんとおかんが寄ってきた。

「正直、おまえにはまったく期待していなかつたがあー、世の中には不思議なこともあるもんだなあー」

……つたせい、おとん。

さりげなく傷を抉るよつたこと言つた。

「それもこーんなハンサムな王様とおー。わたしがもうちょつと若かつたら代わりたかったわー」

……もうちょつとつて、それでも歳取りすぎだらう、おかん。

「……しかし、ハルカの両親は変わつてゐるな」

カレヴィは溜息をついてしみじみと言ひ。

……わたしがここに来るまでにおとんとおかん、いつたいなにをやつたんだ。

千花に聞くと、一人は狂喜乱舞の踊りを今まで披露していたらしい。

うわあ、変な酔っぱらいだ……。傍田にはさぞ奇妙な光景に映つただろう。

しかし、おとんとおかんに踊り癖があるなんて初めて知つたよ。なんだかさつき一人にムカついていたのが馬鹿馬鹿しくなり、わたしは手元のルルア酒のグラスをうつかりあおつてしまつた。

そしてその後。

見事に出来上がつてしまつたわたしは、カレヴィを床に正座させて「政略結婚も結構だけど、そればっかりつていうのはどうなの？」それに、もしわたしがとんでもない不細工だつたらどうしてたの？」と懇々と説教していたとか。

それを後で千花から聞かされたけど、わたしはまったく覚えていなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5607y/>

---

王様と喪女・改

2011年11月24日23時18分発行